
とある忍者の写輪眼

hearts666

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある忍者の写輪眼

【Nコード】

N1511S

【作者名】

hearts666

【あらすじ】

とあるの世界に介入した万華鏡写輪眼を持つ男がやらかす話です。

第一話（前書き）

久々の投稿です！

三話連続で投稿しますからなにか感想をくれると嬉しいです！

でもあまりキツイことをいったら泣きます）、；、；、（

第一話

NARUTOって面白いですね

いろんな忍術とか体術があって、なんかこつ中二心をくすぐられるような……。

読んだことある人なら真似して印を結んだりしますよね？

あつ……ないですか……

そんなバカみたいなことはしないと……

テメエとは違うんだよ、このカス野郎と……。

さっさと帰ってママのおっぱいでも吸ってるこの童貞と……。

おい、さすがに泣くぞ？マジ泣きするぞ？もうプライドとかねえぞ？

まあこの話はこのぐらいにしといて、俺こと立花 葵（男）がなぜこんな話をしているかと言うと……、

ハイ、その君言っただけなん。

セイツ！

そうだね、プロテインだね！

このくだりがやってみたかった。後悔はしている。

まあ、要約しまくと、死に方が可哀想だったから生き返らせて
やんよ／＼／＼／＼／

みたいなツンデレを目の前にいる女神様ならぬ口リ神様に言われ

てる状態。

ちよつと詳しく言つと、

俺死ぬ（風呂で居眠りして溺死）

何故か目の前にちつちやな女の子。

持ち前の紳士さで一緒に遊んであげる。

めっさなつかれる。

現在。

こんな感じ。

あゝゆゝおk？

「お姉ちゃんの生きたいところなら何処でも良いよゝ」

「お兄ちゃんです。」

「今ならお姉ちゃん好きな能力を3つつけてあげる〜！」

「お兄ちゃんです。」

「さあ！早く選んで！おねえ…お兄ちゃん？」

「ねえ、そんなに俺って女顔？」

少し傷つきながらも考えてみた。

まずは能力から選ぶか…。

やっぱりNARUTOでしょ。前半にあんなに推してたのに、ここでBLEACHはないでしょ。よし、ならやっぱり…

「万華鏡写輪眼を失明とかなしないで使えるようになりたい！」

「良いよ！」

「さすが神様！」

「次は？」

「じゃあ忍術全部使えるは？」

「うーん……、さすがにそれを見ると、願い2つ分ぐらいになるかな？」

どうやら神様でも難しいようで少し表情を歪めてる。

さてどうしよう、ここで2つ使うか、違う能力にするか。

俺的にはNARUTOの能力以外にもあと一つ、『あの能力』を入れたい。

思考中……

よし決めた！こうしよう！

「2つ目は莫大なチャクラで、3つ目は『で！』」

「わかったー じゃあ転生するよー、」

「ハイ！始めてください！」

「いつくよー…、それッ！」

女神様の可愛いかけ声と共に俺は眩い光に包まれた。

あれ？行きたい世界言っただけ？とか思いながら。

第二話（前書き）

二話目です

第二話

少し俺が生きてる頃の話しよう。

俺は十五才で、今度の四月を迎えると高校生だった。一応運動は得意で、高校もスポーツ特待生だった。

俺の家族は両親と妹がいた。妹はまだ6才で、もう可愛さ爆発だ。

おい、その「ロリコンwwwwwwキモスwwwwww」とか言った奴、あとで職員室まで来なさい。

ちなみにお風呂も一緒に入ってますよ。

！
通報はやめてください。俺が入ったら勝手に入ってくるんです

あつ、痛い痛い！石投げないで！

そう考えると、もしかしたら妹が俺の遺体の第一発見者なのかな？

そう考えると、少し……悲しい。

両親の仲はあまり良くない。顔を合わせたら喧嘩の毎日。離婚しなかったのは世間体を気にしてたから。

妹にとっては俺が親代わりだったかもしれない。

妹と別れるのは現世での唯一の心残りだ。

まあ俺の話もこのぐらいで良いだろう。そろそろ俺も起きるとする。

起きたら、新しい世界が待ってるはずから。

第三話

あれだよ、人生って上手くいかないよね。

最後の最後でこれってね。何？これがオチ？さすがにないよ。溜めて溜めてドン！って意味わかんねえよ。

あつ、皆さんこんにち。皆さんも期待してたゲームが発売延期になったことってありますか？

ちなみに俺はないです。

だから石はダメーッ！！

まあ発売日知らなくて売ってたら買うタイプですから、その代わりに欲しいものが売り切れはよくあるんですよ。

話はだいぶずれたけど、まあ言いたいことは、

このNARUTOの世界じゃなくね？

だってフツーに車とか走ってるよ？忍者とかいないよ？

逆に最先端技術をもった「とある魔術の禁書目録」の世界だ。

何？禁書に金かけてたのバレた？

それともwebラジオ聞いたのがバレた？

確かにNARUTOの世界に行きたいと言ってないけどさあ…
…、そこは考えようよ。チャクラと写輪眼って言ったらNARUTOでしょ……。ここまで来たら発売延期どころか発売中止レベルじゃあねえかよ…。

いやまあ好きですよ？禁書。

単行本とか原作とかも読みましたよ？

新約出たときはガッツポーズしましたよ？

そんなこと考えながら俺は小学校に通ってます。

名前は何故か前世と同じ立花 葵。顔も前世と同じ女顔だ。

同級生（小学六年生の男の子）に何回コクられたことが……。

自慢じゃねえが女の子にも何回かコクられたぜ！

百合っぽかったが……。

何度かニュースで学園都市を取り上げているのを見たので気がついていた。

はあ……、どーしましょ？

原作に介入はモチロンだが、どっちに行こう、『とある魔術の禁書目録』で魔術師相手にドンパチするか、『とある科学の超電磁砲』で女の子とイチヤイチャするか……。

まあ男ならもちろん女の子と……グフフ……

通報はヤメテー！！（ノ、ノ、ノ）

えっ？修行はしてねえのかこの変態って？

もちろんしてるよー、困った時の影分身で。術の練習だってロリ神様がオマケでくれた巻物に書いてあったし。 (二年間ずっと嘆願してたらくれた。)

まあそんな感じで日々を過ごしてます。

まあ明日の卒業式を終えると俺も学園都市に行くことになっていた。

神様の力って奴かな？

まあ楽しみにしとこつと。

第三話（後書き）

いかがでしたか？

まだまだ駄文ではありますがどうかよろしく願います。

あと感想、評価を下さい！

オリキャラ説明（前書き）

あんがい短かったからあとがきに入れればよかったと思ったけど、もったいない気がしたのでいれてみました。

オリキャラ説明

名前 立花 葵（タチバナ アオイ）

性別 男

身長 164cm

体重 48kg

容姿 真つ黒な髪で男にしたら長め、顔立ちはそんじゃそこの女の子より女の子。

性格 容姿とは裏腹に男。女っぽくはない。基本マイペース。子供が好きっていう訳ではないけど、妹がいたせいか自分より年下の子供が泣いているとほおっておけない。

能力 万華鏡写輪眼（瞳の模様は六芒星）

風遁、雷遁、火遁、水遁の忍術を使う。

基本の戦闘は四代目火影のように飛雷神の術を織り混ぜた独特の戦闘方法

システムスキャン
身体検査の結果level 10

オリキャラ説明（後書き）

四話目も投稿しますので見てやってください！

第四話（前書き）

今話から本格的に原作に介入していきます。

第四話

ここ学園都市第二学区『風紀委員訓練所』には風紀委員を目指して日々訓練をしている生徒がいた。

（まったく……何でわたくしが志願生と一緒にになって訓練など受けているのでしょう）

「ふぐ……」

（こんなトレーニングを繰り返すために風紀委員になったわけではありませんのに……）

「又グググググググググ……」

（しかも……）

「ふひゅっつっ……」

（先ほどから腕立て一回もできないような方の隣で……）

ジャッジメント
風紀委員

各校より志願し、選抜された生徒達によって運営される学園都市の治安維持機関である。

危険を伴う職務であり、また高いモラルが求められるため、九枚の契約書にサインし、十三種類の適正試験と四ヶ月の研修をクリアした志願生にのみ資格が与えられる。

「はいラスト一周！がんばれ」

体がごつつく、いかにも体育教師のような男が、息も絶え絶えて走ってるよ女の子を見ながら言った。

「あれ、まだ走ってる子いるんですか？」

荷物を持って、たまたま通りかかった女性がたずねてきた。

「ブービーに四周差つけられてるからなあ」

「うわぁ……それじゃ最後まで残るのは厳しそうですね……」

S I D E

立花葵

卒業式を終えて二週間後、俺は学園都市に来ていた。

「やっと原作に介入することができた……」

と歓喜に震えていた。

「でー……ここどこ？」

あと迷っていた。

どーしましょ？まあとりあえず歩いたらどっかに着くだろう。
と我ながら短絡的に行動したと思う。

だがこの行動は正しかった。

「ッ！！？」

いきなり目の前に頭がお花畑（文字通り）な女の子が現れた。

「え？え？外……？」

本人も状況がよくわかっていないようだ。

だが俺の原作知識では確かこの時ぐらいに強盗が……。

「おい、どうした!？」

俺は少女の肩を揺すった。

「あ……」

その娘をよく見たら目に涙をいっぱいためて、今にも泣き出しそうになってた。

おいおい……、折角の記念すべき日を邪魔するとはいい度胸だ。

なんとかその少女から話を聞き、だいたいの状態はわかった。

興奮していて言葉は支離滅裂。順序もへったくれもない、意味のよくわからない日本語。

だけど、それ故に伝わった少女の思い。

『白井さんを助けてあげて!』

「話はわかった。君は待ってて……」

「え…何処に行く…」

俺は女の子の言葉を無視して印を結んだ。

S I D E 白井黒子

白井 黒子は困っていた。

大見得は切ったものの対抗手段がない。これは自分が作った危機。これに人を巻き込んでしまったのは自分の甘さのせいだ。せめて初春が呼んでくれる応援が来るまで時間稼ぎを……！

そう思い、相手にかかろうとした瞬間、

「はいストップ。」

やる気のない声と共にいきなり人が強盗犯と黒子の間に割って入った。と言うよりも現れた。

その容姿は女らしさもあり、それでいてどこか男らしかった。

黒子は一瞬自分と同じテレポーターかと疑ったが、何処か違和感を感じた。

「なっ！！？」

強盗犯も思いも寄らぬ介入に驚きを隠せなかった。

その介入者はあたりをキョロキョロ見回しあと、数秒考えて。

「悪い子はお前か……?」

その時の顔は後世に伝えられるほど凶悪な顔でした。（白井黒子
後日談）

すると強盗犯は身の危険を感じたのか近くにいた女の人を人質にした。

「う、動くな！武器を捨てろ！」

人質ッ！また私の甘さのせいで人が……！

そう思い私は痛めてる足を無理にでも引きずって飛び掛かろうとすると。

「なっ！」

あたりからいきなり木が生えてきて身動きがままならなくなった。

「そこから動くなよ……」

その言葉を聞いたからってすぐ近くには強盗犯、抜け出すことを諦める訳にはいかない。

「早く逃げてください！あなたがかなうような相手じゃあ…！」

「心配すんな。俺はお前より強いから」

ボタン

そう言い放った瞬間、強盗犯はいきなり糸が切れた人形のようにぐずれさった。

黒子には何が起こったかまったくもってわからなかった。

SIDE 立花葵

「うっ、動くな！武器を捨てろ！」

強盗犯は人質をとりながら俺に言ってきた。

正直ボコボコにしてやりたかったが人質がいるので下手に動けない。後ろの黒子は今にも飛び掛かるうとしている。

はあゝ…めんどくせえ！

やっぱりここに来るんじゃないかなったと思いながらも印を結んで黒子が飛び掛からないように幻術を見せる。

魔幻・樹縛殺
まげん・じゆばくころ

「なっ！！」

どうやらちゃんと術が発動したらしく、後ろにいた血気盛んなお子さんは何も無い所で一人芝居をしている。

ここでレポートを使われて壁に挟まれるのも寝起きが悪いから一つだけ忠告。

「そこから動くなよ…」

まあそんなこと言っても動くよねゝ。なんてことを考えていたので速攻で決めることにした。

「心配すんな。俺はお前より強いから」

そう言い放つと同時に万華鏡写輪眼をつかい月読を発動し、三日間くすぐり続けられる幻術を見せた。

もちろん男は気絶。場は何が起こったかわからない。

かけた俺も人相手に幻術はあまり使ったことがないので不安で足がガクブル、生まれたての子ヤギよりもひ弱そうだった。まあ結果は成功だったので胸をなで下ろしていると、

「そろそろこの樹を何とかして欲しいですよ…」

黒子のことをすっかり忘れていて術をかけっぱなしにしていた。

「わりーわりー、忘れてた」

「これはアナタの能力なんですか？」

「そんなもん」

「じゃあ先ほどの瞬間移動は？」

「気合い」

「じゃ、じゃあ男が倒れたのは何故ですか！？」

「漢気」

「あなたは女じゃありませんの！？」

「男じゃボケ！」

「嘘つくんじゃありませんの！その顔立ちはどっからどうみても女性しかあり得ませんか！！」

「あア！？！ここで脱いでやろうか！？」

「こんなところで脱ぐなんて破廉恥な！」

「もうお前絡みずれえよ！！」

どうやらみんな俺のことを『女』にしたいらしい。

その後強盗犯を縄でしばり、アンチスキルが来る前に俺はトンスラここつとすると、

「いろいろ事情を聞きたいので待つて欲しいですの」

と笑顔で言われたがめんどくさいのでダッシュで逃亡した。後ろから「責めて名前だけでもー！」とか聞こえたが幻聴だと信じて走り抜いた。

が、どこに行っていないかわからないので、また半べになりながら街をうろついたとき。

おしまい、おしまい。

S I D E ? ? ?

ビルの中機械が放つわずかな光に照らされている人がいた。

男か女かさえわからない。

その人は薄く笑みを浮かべ、

「ふむ……見たことのない力だ……面白い、君はいつたい私に何を証明してくれる？」

第四話（後書き）

いかがでしたか？

感想、評価をお願いします（――）

第五話

そして時間は流れた。

いやいや早くね？って思った奴！それは正しいから自信をもっていよ！！

まああれから4ヶ月ぐらいは経ったかな？引越して以外に大変なんだよね。

季節は夏に両足をつ突っ込んで、人々の頭がぽぽぽんになる季節だ。

俺がなんだが……。

あれから原作のキャラにはあっていない。

そんな俺も今、セブンスミストに行こうとしています！

なんでまた行こうと思ったかと言つと…

「夏服がない……」

半袖とか短パンとかが、なぜか一枚もないと言つカオスな感じに。
あとそろそろ行動を起こさないと来るべき時に間に合わなくなる。

俺だつてちゃんといろんなこと考えてるんだからね！

まあそんな感じの軽い気持ちなんだけど、今巷で話題になっている
『連続虚空爆発事件』（クラビトン）が、確かセブンスミストで起
こるはずだからそこを狙う！

上琴は好きだけどここはもらわせてもらいますよ。

ではミッション開始！

SIDE 黒子

風紀委員活動第一七七支部に一人、白井 黒子はいた。

「やっぱり場所も時間も関係性が認められませんか……」

黒子はこの頃連続的に起こっている『虚空爆発事件』をおっていた。

「もう少し手掛かりがあれば、容疑者の絞りこみもできますのに」

しかし犯人を特定するものがひとつもなく事件は行き詰まっていた。

「遺留品を^{サイコメトリー}読心能力で調べても何も出ませんし、同僚が九人も負傷しているというのに……何か……」

ここで黒子はある違和感に気づいた。

「九人！？いくら何でも多すぎではありません？」

SIDE 初春

今私は佐天さんと御坂の三人でセブンスミストに来ています！

白井さんには悪いですけど…。

ちなみに御坂さんがトイレに行っているので待っています。

くくく

この着信音は私のケータイだ…

「はい、もしも…「初春ッ！！！！今どこにいますのっ！！？」」

「しっ…白井さん！？えつと現在警ら中でありまして決してサボっている訳では…」

「例の虚空爆発事件の続報ですの！」

「えっ！？」

「衛星が重力子の爆発的加速を観測しましたよ」

「か、観測地点は？」

「今、近くの風紀委員を急行させていますの。あなたも速やかに現

場に向かいなさい」

「ですから観測地点っ……」

「第七学区の洋服点『セブンスミスト』ですよ！」

「ラッキーです！私、今ちょうどそこにいますっ……！」

「何ですって！？初は……！！」

携帯を切った。

今度は……今度こそは絶対に……！！

研修中だったころの事件を少し思いだし、心に誓った。

S I D E 葵

人がだんだんいなくなってきた。

それもそのはず、さつきから店内では電気系統のトラブルが起きたから避難しろってアナウンスが流れている。

「さて…そろそろお仕事だ」

SIDE 美琴

「よしっ、とりあえずこれで全員…」

「あの子は？」

全員が避難したか確認している途中、ツンツン頭の『上条 当麻』が慌てたように話しかけてきた。

「は？まだ戻ってなかったの？」

「人が多すぎてよくわかんねーけどたぶんまだ……」

美琴はその言葉を聞いた瞬間嫌な予感が身体中に響き渡った。

「おねーちゃん」

すると女の子がどこからかパタパタと歩いてきた。

そのことに気づき安堵の息を漏らした。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

といいながら渡してきたのはつい先程みかけたカエルの人形だった。

その瞬間初春は女の子から人形を奪い取り、それを投げた。

「逃げてください！！あれが爆弾です！！！！」

そう言い放った瞬間、人形はべきべきと形を歪めた。

レールガンで爆弾を吹き飛ばそうとしたが、無情にもコインは手のひらから滑り落ちた。

誰しもが死を覚悟した瞬間、声が響いた。

「須佐能乎^{すけのお}」

ドン

尋常じゃないほどの爆発が起きた。巻き込まれたらただじゃおかないほどの火力だった。

だが『巻き込まれたら』だ。

「生き…てる？」

みんな呆然としていた。

それもそのはず、誰一人ケガをしていないからだ。

「生きてる？」

やる気のないような声が聞こえた。

声の方向を見ると、目が紅く、その中に六芒星がある少年が立っていた。

SIDE 葵

避難が終わるまでブラブラしてようと思った俺はそこら辺をうろちよろしていた。

「爆弾を壊すか、防ぐ…どっちにしよう？」

と考えていると女の子がメガネをかけた男に人形を渡すシーンに出くわした。

その時、いつもはあまり働かない俺の頭がフル回転した。

こいつらに目印につけたら楽じゃね？

そうと決まれば即行動！

俺はいかにも一般人らしく、

「君たち、避難しなきゃだめだろう？」

メガネをかけた男は肩をビクツと震わせたあと、青ざめた様子で、

「あつ…はい！今すぐいきます。」

「君…具合でも悪いのかい？」

そういつてさりげなく体をさわり目印となる術式をつけた。

「だ…大丈夫ですんで…」

「そうか、じゃあ君も早く避難しなさい。私は上の階を見てくる。
女の子もいきなさい。」

今度は女の子の体を軽くさわりこちらにも目印をつける。

「うん！」

女の子は元気いっぱいにならずいた。

「じゃあ私は行く。あとは任したよ。」

と言って俺はその場を離れた。

その時の俺は柄にもなくイラついていた。

俺はまずメガネの爆弾魔を殴り飛ばそうと考えたが、証拠もないのに殴るのはさすがにできないと考え、女の子の方を優先することにした。

案の定女の子はメガネの言うことを守ったらしく、カエルの人形を頭がお花畑の（文字通り）風紀委員に渡していた。

しかし風紀委員も気がついたらしく、女の子から人形を奪い取り誰もいないところに投げた。

しかし所詮は女の子、人形は遠くに投げるのは難しい。

俺は即座に印を結び女の子の元へ飛んだ。

そして女の子の前に出た俺は両目の写輪眼を発動し、須佐能乎すこのおを呼び出した。

爆弾は強力だったがなんとか全員を守ることができた。

「生きてる〜？」

と俺は後ろにいる四人に軽い調子でたずねた。

「紅い……目？」

短髪で茶色がかった髪の毛の女の子が聞いてきた。

「ケガとかないようだね、良かった」

「お前、誰だ？」

ツンツン頭の少年が疑うように聞いてきた。

「立花 葵っています。アンタは？」

「俺は上条 当麻、助けてくれてありがとな！」

「私は御坂 美琴よ」

「初春 飾利です…貴方もしかして白井さんを助けてくれた人ですか？」

「おー！もしかして郵便局の？」

「そうです！あの時はありがとうございました！」

「いえいえ、あの人なんか言ってた？」

「ハイ！次あつたら逃がさないって」

「会う気がなくなつた！」

「えっ？どういこと？」

いきなり初春と話が弾んだが残りの二人はまったくついていけないようだった。

「あつ！犯人を追わなきゃ！」

御坂は思い出したかのように言った。

「待ってください。俺が行きます」

「えっ、でも……」

「俺もちよつと腹がたってるんで」

俺はそう言ったあと印を結びもう一つの目印に飛んだ。

SIDE ???

「もうすぐだ！あと少し数をこなせば無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて吹き飛ばせる！」

その人の心は狂っていた。

傷つき、淀んで、壊れかけていた。

悪いのは力任せに傷つけた人達。

悪いのは助けることのできなかった人達。

悪いのは助かろうと努力しなかった本人。

だから問おう。

『お前は何がしたい？』

「ハッ！やり返すんだよ！！僕を傷つけた奴等や、助けてくれなかった無能な風紀委員たちに！！」

『お前はどくなりたい？』

「誰も僕をバカにしないくらいに強くなりたい！」

『そうか…、では最後の質問だ。』

お前はいつ、自分を棄てた？』

「…ッ！」

その一言で一瞬息が止まった。

第五話（後書き）

最後の台詞はディーなんちやらを意識しました

もうストック切れたよ……orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1511s/>

とある忍者の写輪眼

2011年4月6日21時51分発行